２０２３年３月１２日大斎節第３主日

出エジプト記 17 章 1-7 節
ローマの信徒への手紙 5 章 1-11 節
ヨハネによる福音書 4 章 5-26,《27-38》, 39-42 節

すっかり春らしくなりました。また明日の３月１３日から厚生労働省の文言では、コロナ対策のマスクも、個人の判断にゆだねられることとなります。教会も復活日以降それに従う予定ではありますが、花粉のアレルギーがひどい方は、しばらくマスクは、外せそうにないかもしれません。

さて、本日の旧約日課は、出エジプトの際に、イスラエルの人々が水について、主なる神様に苦情をいう物語です。また、福音書は、イエス様とサマリアの女性とのやり取りを中心にした、「永遠の命に至る水」についての物語です。これらは、水を主題にしてつながりがありますが、使徒書のローマの信徒への手紙は、水とのつながりはありません。しかし、苦難を超えて、イエス様を通して主なる神様を信じることについて語っており、その点ではつながっています。その苦難とは、わたしたちの苦難であり、またイエス様の苦難です。大斎節は、それら苦難の意味を学ぶ時でもありますので、本日は使徒書を中心に学びます。

この手紙が宛てられたローマという町は、イエス様の時代に地中海世界を支配していた、ローマ帝国の首都です。当時でも数十万人の人口を持つ大都市ローマにも、早い時期からいくつかの教会がありました。この手紙が書かれた時は、ローマに住んでいたユダヤ人と異邦人のキリスト者たちによって成立した、規模の小さい家の教会であったと思われます。それらは、コリントの教会のような、パウロの設立した教会ではなく、また訪問したこともない教会でした。それ故に、この手紙の内容は、コリントへの手紙のように具体的な事柄を内容としているのではなく、教会の教えについての、いわば神学的な内容が中心になっています。

本日の個所は、３章２１節から８章３９節の「信じて義とされる」(信仰義認)、という事柄を主な内容とした部分に含まれます。信仰義認という言葉は、信仰か行為か、という二者択一の事柄として捉えられやすいのですが、そうではありません。パウロがこの表現を通して示していることとは、イエス様を通して主なる神様を信じることによって、ユダヤ人・異邦人の区別無く主なる神様から義とされ、キリストの一部として新しく創造されるということです。ただしパウロは、信仰によって義とされた信仰者が、どのように生きるのかが重要であるとも強調します。その点では、イエス様を信じることを通して、「永遠の命」を実感することを強調する、「ヨハネによる福音書」と神学的に異なるといえます。しかし、主なる神様の愛を通して救われたことを実感し、そこを出発点として、その後の信仰者の歩みに、イエス様が示された愛の実践を求めている点は、共通しています。

まずパウロは、１～２節で「**主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています**」と、信仰によって義とされた者の状態について確認します。それは主なる神様との和解に生き、最終的な救いに与る希望をもっとも大切なもの（誇り）として生きることです。更にその

希望が苦難から生まれることを、「**わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを**」（ロマ 3〜4）という有名な表現によって示します。それは、信仰者一人ひとりが信仰に生き、たとえ苦しみ（苦難）があっても、信仰を持ち続ける（忍耐）によって、義とされ新しい人間とされ、そこから円熟さ（練達）が生まれ、そこから救いの確信（希望）が生まれるということです。パウロはまた、「**希望はわたしたちを欺くことがありません**」と、その希望が決して失望に終わらないと断言します。何故ならば、「**わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです**」（5 節）と、聖霊によって主なる神様の愛が、血液のように心（心臓）を中心にして、信仰者の体全体に満ちるからです。パウロは、ヨハネ福音書のように信じると同時に救いが完成するとはしないのですが、ヨハネ福音書と同じように、聖霊を通して信仰者が主なる神様の愛によって守られ導かれると考えているのです。

6 節からパウロは、愛の源である十字架の意味をもう一度確認します。パウロは、イエス・キリストの十字架の死を、自分を含めて神を本当に信じていなかった（弱かった）人々のための死であり、それが特別であったことを確認します。しかし、7 節の「**正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません**」は、少しわかりにくい表現といえるかもしれません。基本的に誰かが誰かのために死ぬことはない、という前提があるのですが、「正しい人」「善い人」という区別が理解の混乱を招いています。「正しい人」とは、律法（法律）的に正しい人、律法（法律）を守る人です。言い換えれば、「普通の人」（法律を守るのが普通ですから）といえます。そう考えますと、たしかに「普通の人」のために命を捧げる人はあまりいないでしょう。「善い人」とは、その人が本質的に善と考えるものを基準として、それを満たした人です。その人が尊敬、理想、希望、愛、美などを感じるような人です。そのような人のために命を捧げる人はいるかもしれないということです。しかし、その逆、罪人のために命を捧げることはありえないことだと強調しているのです（7 節）。そして、だからこそ、それをなさったイエス様の十字架には、主なる神様の愛が示されるのです（8 節）。

最後にパウロは、信仰によって主なる神様と和解させていただいた信仰者の希望が、いかに確実なであるかを確認します（10 節）。そして何を最も大切なこと、誇りとするか、つまり何を大切にして生きるのかについて触れます。その答えは「**わたしたちは神を誇りとしています**」という当たり前すぎるものです。しかし、「**わたしたちの主イエス・キリストによって**」とあることが大切です。それはイエス様の十字架を通してでなければ、私たちは、主なる神様の愛を知ることも、愛することもできないからです。ここでもパウロの論理の中心は十字架です。その中心である十字架の意味を、大斎節に改めて深く心に刻みたいと思います。この世界にはいまだあらゆる苦難があります。しかし、イエス様を通して主なる神様を信じる時、その苦難の先には、必ず希望があることがわかります。この世界に満ちているあらゆる苦難が少しでも減ることを願い祈りつつ、わたしたちは、わたしたちの教会を通して信じ続けていきましょう。